

2022年2月6日（日）「律法と御霊」

ガラテヤ 3:1-5

1 ああ、愚かなガラテヤの人たち、十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前にはっきりと示されたのに、誰があなたがたを惑わしたのか。2 あなたがたにこれだけは聞いておきたい。あなたがたが霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも、信仰に聞き従ったからですか。3 あなたがたは、どこまで愚かなのですか。霊で始めたのに、今、肉で仕上げようとするのですか。4 あれほどのことを体験したのは、無駄だったのでしょうか。そうしようとしているなら、本当に無駄になってしまいます。5 神があなたがたに霊を授け、あなたがたの間で奇跡を行われたのは、あなたがたが律法を行ったからですか、それとも信仰に聞き従ったからですか。

【序論】

昨年より一緒にガラテヤ書を学んでおりますが、私自身もパウロの息遣いを感じながら読み進めています。とりわけ、3章に入りまして、彼の語調が極めて厳しくあからさまになってきたことに驚きを禁じ得ません。今日は五つの節だけを扱いますが、その中で二度も登場する「愚か」という言葉は、およそ通常の手紙では見られない類のものです。パウロが所謂「読者への配慮」というものをかなぐり捨てて、使徒としての思いをぶつけていることが分かる。「愚か」という日本語はまだやさしい。「理解力なし」「知性なし」、あるいは「馬鹿」と訳している人までいます。当時この手紙を受け取った教会の人々はどういう思いになっただろうかと考えざるを得ませんでした。自分がこんなことを言われたら、素直に受け入れられるだろうか。「ああ、自分は本当に愚かだった」と思うか、それとも「こんなことを書いてきやがって」と憤るだろうか。この手紙が最終的にどのように理解されたかは、これが正典として残っているところに現れているでしょう。パウロの思いを理解した人々がいたのです。自分の危機的状態に気づいて福音に立ち返った人々がいたからこそ、後世にまで語り継がれるものとなったのです。

【本論】

今日の二つのキーワード、「律法」と「御霊」の関係は少々説明しにくい面があります。どちらに聞き従うにしても、形の上では似た結果をもたらすところがあるからです。しかし、内実は似て非なるものであることをご説明していきたいと思います。

本論 1. 惑わし

ああ、愚かなガラテヤの人たち、十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前にはっきりと示されたのに、誰があなたがたを惑わしたのか。(3:1)

これまでに学んでまいりましたように、ガラテヤ教会の人々が陥っていた問題とは、無償で受けた救いに「律法の行ない」を付け加え始めたことでした。それは彼らが、無用な割礼を受け始めたところに現れていた。これは、パウロに言わせれば、救いに至るために人間の側で何がしかの行為を行なおうという意思表示にほかなりませんでした。

「十字架につけられたイエス・キリスト」とは「罪の赦し」の言い換えで、私たちの状態とは無関係に神が与えてくださった救いを意味します。罪ある者が、神の宣言によって罪なきものとされてしまう。主イエスの十字架が私たちの罪の赦しを表しているのです。しかし、ガラテヤの信徒たちは、その「罪の赦し」を見失い、「無条件」だった赦しを「条件付き」に変更し始めていました。パウロはこれを「惑わし」と呼びます。一度見出した真理に覆いが被せられてしまう。自分がもう赦された存在であることが信じられなくなってしまう。このような状態は他人事とは言えません。

人の心に残る罪責感というものは、長く尾を引く傾向があります。特に、人との関係において犯した過ちは、完全な許しに至ることが難しいのを私たち自身が知っているでしょう。人の心に与えてしまった傷はそう簡単に消えるものではなく、法的に償いさえすればなかったことになるというものでもありません。被害者の心には傷が残り、加害者の心には「許されていないのではないか」という恐れが残ります。それは、人間には完全な許しを実現することが困難だからです。「赦し」というのは、まさに「神業」であり、完全な赦しは神にしかできず、神の許にしか存在しないのです。

そのことを知った上で、私たちはもう一度自分の「罪の赦し」と向き合わなくてはなりません。神が与える赦しを人間の基準で測ってはいけないということです。神は不完全な赦ししか与えることができないのか。いつまでも恨みつらみを言い続ける方なのか。「赦す」と宣言したことばを覆す方なのか。嘘をつく方なのか。神には罪がなく、聖書に書かれていることはすべて真実であるというところに私たちは立たなくてはなりません。

ガラテヤの信徒たちが陥った過ちとは、神の赦しを不完全なものと見たこと、赦されるために何かをしなくてはならいと考えたことです。神を過小評価し、約束のことばに疑いを持ったのです。彼ら自身には、そんなことをしている自覚はなかったでしょう。しかし、恵みに何かを付け加えるとは、本質的にそういうことを意味しているのです。

本論 2. 律法の働き（上からの強制）

あなたがたにこれだけは聞いておきたい。あなたがたが霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも、信仰に聞き従ったからですか。（3:2）

さて、ここに「律法」と「霊（御霊）」の対比が現れます。律法とは、神の法であり、人の生きるべき道、そのことばに従って生きれば幸せになれる道です。法であるからには、それに適う生き方とそうでない生き方があるのであって、適わぬ生き方は「罪」となります。旧約聖書では「～すべし」「～すべからず」という戒めが成文化されており、神が人間にこれをお与えになった目的は、それなくしては人間はどこまででも悪に染まっていく傾向がありますから、それを規制するところにありました。確かに、聖書を知っていると知らないとは、人間の倫理観には天と地ほどの差が生まれてくるでしょう。

しかし問題なのは、律法というものの性質が、人間の行動を上から規制するものであることです。私たちも人生の各時代に経験してきていることですが、子どもの頃は親から「こうしなさい」「これをしてはいけません」ということを言われ、それにある程度従って生きていたものでしょう。しかし、そのように上から決められたことというのは、いつも喜ばしいものというわけではありません。約束を破ったときに課せられる罰を恐れて従っていることも多分にあります。「一日にこれだけの時間勉強しなさい」「ゲームはこれだけの時間にしなさい」と言われるとき、そこには強制力が働いているのであって、子どもが本来「こうしたい」と願っているところから出てきたものではありません。言うなれば「厭々従っている」のです。

これは子どもの時代だけ経験するものではなく、望ましくないことが法律で定められてしまい、従わなくては痛いペナルティを課せられてしまうような大人の世界においても同じことが言えます。そういうとき、私たちは喜んで従っているのではなく、納得のいかない状況を苦虫を噛み潰しながら受け止めているのです。もちろん、人間が定める法と神が定める法が同じなわけではありません。人は悪しき目的をもって民を統制することがある。しかし、神はあくまでも人間の幸せのために法を定めておられるのです。とはいえ、人間の側がそう感じないこともある。

律法を行なうことで神の御前に義とされようとする姿勢は、その戒めが人間の悪しき性質と反対方向へ向かうことが多いものですから、どうしても神に対する不満が伴うものとなります。なぜ日曜日に家でゆっくり過ごしたいのに、礼拝に行って奉仕をしなくてはならないのか。それは「定められているから仕方がないのだ」という感覚があるならば、私たちはいつしか礼拝の本質を忘れしまっているでしょう。私たちの奉仕が形式的になっているとき、そこには律法主義の影が忍び寄ってきています。

本論 3. 御霊の働き（自発性を促す）

あなたがたは、どこまで愚かなのですか。霊で始めたのに、今、肉で仕上げようとするのですか。（3:3）

「霊を受けた」（2節）、「霊で始めた」（3節）という表現が出てきますが、これは神の霊が心に宿ったことを意味します。パウロは、無機質な律法の規制によって神に従う道ではなく、キリスト者は神の霊に生かされ、喜びに溢れて神の御心を探り行なう存在なのだと言っているのです。神の霊は、人の心から恐怖心を取り去り、神に受け入れられている安心感とともに、喜びをもって仕える自発性を与えます。この自発性こそ、聖霊の賜物であり、罪の赦しの実です。

分かりやすい例を挙げましょう。勉強というものは、その学ぶ事柄が面白いと感じなくてもは、決して人に稔りをもたらすものとはなりません。（皆がそうなのではありませんが）義務教育で受ける授業がどうしてもあんなにつまらなく感じたのか、その必要性が分からなかったからではないのでしょうか。自分の生活と何のつながりもない事柄を押し付けられる感覚を覚えているうちは、学習には何の意欲も湧いてこないのです。しかし、自分のやりたいことが明確であり、そのためにこれを学ばなくてはならないということがはっきりと理解できてきますと、もう必死でその勉強に取り組めます。

聖霊の働きというのはこれと似ておりまして、神を愛するためにはどう生きればよいのかということを学びたくて仕方がない状態へと人の心を導くのです。かつてのように厭々従うではありません。どうしてこの戒めが神を喜ばせることになるのかという、湧き出る探究心によって聖書を学ぶようになるのです。聖書を読んでいて楽しい、日々神が自分に語りかけてくださることを実感する。そういう感覚に生きようになります。

しかし、その前提にあるのは常に、自分が「赦された」存在であるという事実です。神が一方的に私を愛し、揺るがぬ義を与えてくださった。その感謝に溢れて生きるところには、失敗に対する恐れありません。自分に与えられた賜物をどう用いて主にお返ししていくことができるだろうか。そのことばかりを考え、最大限にこの人生を用いていきたいと願うようになる。それが、「御霊によって生きる」という状態です。

ガラテヤの信徒たちは、そのような人生を歩み始めていたのに、再び上からの規制に従う道を選び取ろうとしていました。「肉で仕上げる」というのは、割礼を受けることを皮肉っているとも言えます。

あれほどのことを体験したのは、無駄だったのでしょうか。そうしようとしているなら、本当に無駄になってしまいます。（3:4）

「あれほどのこと」とは、無償で義とされたこと、聖霊がその心に宿ったことです。そ

の真新しい神との関係を投げ捨てようとしていた。

神があなたがたに霊を授け、あなたがたの間で奇跡を行われたのは、あなたがたが律法を行ったからですか、それとも信仰に聞き従ったからですか。(3:5)

パウロは問いかけているようでありながら、答えは明白だと前提しています。ガラテヤの信徒たちは信仰によって救いを得、ひとたび神の霊に満たされたのです。その喜びを今になって捨ててはならないとパウロは切実に訴えている。

【結論】

この働きをしておりますと、神の霊に満たされる喜びを味わうことがたくさんあります。説教を書いているときに、福音を書き留める手が止まらなくなることがあります。求道者の方が心の重荷から解放されていくのが本当に嬉しく感じることもあります。そのようなとき、自分の時間はもはや自分のものではなくなっています。自分の人生は神のものであり、救いを与えてくださった方のために何ができるだろうかという自発性が自分の中に存在することを実感します。神がイニシアティブを取って私たちの人生に介入してくださいました。それにどうレスポンスしていくか。上からの規制ではなく、御霊にある自発性をもって主に仕えていきたいと思います。

【祈り】

御霊なる神様。私たちに恵みを与えてくださったことを感謝いたします。恵みによって、私たちは神の御前に生きる者となり、上からの規制によってではなく、自発的な喜びをもってあなたに仕えることができるようになりました。主の御心を知ることは嬉しいことなのです。それは、私たちが心からあなたに愛されている事実がますます開かれていくことだからです。しかし、人間には再び古巣に帰ろうとする性質があり、何かに規制されている状態の方が心地よく感じ始めることがあります。一度得た自由を手放すことがないようお守りくださり、主を愛するがゆえに律法のことばを愛するという良循環を絶えず導き出してください。あなたとの関係が決定的に変わっているという約束に、常に立ち続けることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
律法をもってご自身の御心を示し、人の歩むべき道を照らし給う、父なる神の愛、
神の子として恐れなく神に近づく道を拓き給うた、主イエス・キリストの恵み、
上からの規制によってではなく、自発的な喜びをもって主に仕えさせ給う、聖霊の親し
き交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。